

地域医療科学教育研究センターで、教育や研究開発に携わる松尾清美准教授



佐大フケツチ

昨秋医学部を訪ねた時に「地域医療科学教育研究センター」という看板を見つけた。通りかかった学生に案内された部屋の扉を開けると、以前講演をお願

いした松尾清美准教授がおられた。松尾先生は二十一歳のとき脊髄を損傷し、現在車いすを使って教育や研究開発などを行っている。その日は後日の訪問を約束して再び訪ねた。

前回、センター名に、なぜ地域医療に科学と教育がついてい

地域医療センター 「人間とは」を科学

るのかと思っていたのでそのことをまず質問した。先生は「事故や病気で傷ついた精神や身体を病院で治療するが、障がいが残ったまま再び地域に戻って生活をする人に車いすや補助具を使って『より質の高い生活』すなわち『尊厳を持って生活すること』ができるための機器を開発している。究極的には人間とは何かを科学している」と答えてくれた。

私たちがみな公平に年を取っ

ていく。個人差はあるものの確実に視力は衰え、身体機能は落ちていく。いずれ仕事の現場から離れていく時が来るし、人の手を借りるときが来る。時には立ち止まり、悩む時もあるかもしれないが「現在の自分を客観視し、理解し、将来のことを考えて現在何をしたらよいのかを考えるこの繰り返しではないか」と思いながら先生といろいろな話を話し合った。また、ここでの教育や研究で学生たちを「自律」した人に育てたいと語ってくれた。

あとで見せてもらった車いすやベッドも「器具を作る」ことが先ではなく「それを使う人の動きや心」を考慮して作られたものであった。その中でも、心身の能力が衰えをアップさせるために人の持っている競争心や向上心をとらえ、ハンマーのグリップの太さなどを工夫した「もぐらたたき」ゲーム機には思わず拍手喝采をした。

先日聞いた医学部開設当時から顧問である日野原重明先生の話にも、小さな達成感の積み重ねで人は元気になるとあった。

(佐賀大学理事・北島悦子)

※次回は六月十日の予定です。